

羅 針 盤			担当	方 策	点検・評価		到達度	達成状況の分析	学校関係者評価	次年度の課題
評価対象	評価項目	具体的数値項目			自己評価	外部アンケート				
I 幼児児童生徒の地域における豊かな生活の実現に向けて努めていますか。	1 保護者、地域、関係機関に学校の教育活動について、具体的に伝えていきますか。	①学校から情報発信を行い、保護者の80%以上から満足を得ている。	教務	教育活動の意図や子どもたちの学校での様子、地域での大会等の活躍について、HPや通信、対面等で伝えていく。保護者会だけでなく、送迎や行事など直接やりとりする場面でも保護者に情報発信、情報共有を行う。	A	A	A	行事や日々の様子、部活動の表彰など、幼児児童生徒の取り組み様子を通信やWebページを通して伝えた。保護者会や個別面談、送迎時などに情報発信や情報共有を行った。保護者の95%以上から満足感を得ている。		幼児児童生徒の取り組み様子は、引き続き伝えていく。紙媒体での通信やWebページなど、その特徴に合わせて効果的に発信していく。また、保護者との対面でのやり取りも共通理解を図る場として大切にする。
			幼	学部・学年だより、週予定の中で活動の様子や行事等のねらいや意図を発信する。webページの活用や直接説明する機会も多く設けていく。	—	A		学部・学年だより、週予定の中で活動の様子や行事や活動等のねらいを伝えてきた。また、保護者会で画像を活用したりHPで行事での活動の様子を発信したりした。		学部だよりやHPなどで活動の様子を分かりやすい画像等で発信を行っていく。また、活動のねらいや意図等も保護者と共通理解できるように分かりやすく伝えていく。
			小	学部だよりや学級通信などを通して活動の様子や児童の成長の様子などを伝える。また、直接話をする機会やHPを通して、保護者と情報共有ができるようにする。	—	A		学部だよりや学級通信では、画像を活用したわかりやすい内容で児童の活動の様子を伝えた。また、HPでも学年に応じた成長の様子を伝えた。保護者面談だけでなく毎日の送迎時に学校での児童の様子や学習内容について情報共有することができた。		学部だより、学級通信の内容、発行数は概ね適切であった。次年度も同様に通信等を活用し、保護者との共通理解を図りたい。また、直接話す機会を上手に捉え、保護者と情報共有を図りたい。
			中	学部だよりや学級通信などを通して活動の様子や生徒の成長の様子などを伝えていく。また、HPの活用や保護者会、直接話をする機会も大切に情報発信を行う。	—	A		学部だよりや学級通信等では、取組のねらいや成果などについて画像を活用しながら、わかりやすい内容で伝えた。保護者面談では学部としての方針などを共有するとともに、直接話をする機会も活用して情報共有することができた。		学部だよりや学級通信等の内容や発行数は概ね適切であった。次年度も写真等を活用しながら、生徒の活躍が伝わるようにする。また、保護者面談の機会を大切にするとともに、必要に応じて電話やメールも活用して共通理解を図っていく。
			高	学年だよりや高等部だより、保護者会、個別面談等で生徒の様子や今後の見通し等を発信し、保護者との情報共有に努める。	—	A		学年だよりや高等部だよりで、生徒の活躍や社会自立のための視点、今後の見通し等を発信した。保護者会や個別面談では、家庭での様子や卒業後の生活に必要な力などについて情報共有した。		学年だより、学部だよりで写真等の視覚情報を増やし、外国籍の保護者にも生徒の活躍が伝わるようにする。保護者会や面談等のやり取りができる場で教育活動の意図を伝え、共通理解を図る。
			舎	連絡ノートやずすらん会だより、webページ等を通じて、寄宿舎の取り組みや、子供たちの様子について伝えていく。	—	A		連絡ノートやずすらん会だより、webページを通じて寄宿舎での生活の様子や、寄宿舎の取り組みについて情報の発信・共有を行った。送迎時も情報共有を意識的に行うことができた。		連絡ノートやずすらん会だより、Webページ等で、寄宿舎の取り組みや子供たちの様子を伝えていく。
			渉外	参加定員数を25名に増やしたり、卒業生等の外部講師を呼んだりする等、学校開放講座の充実を図る。	—	—		33名の申込があった。感染症対策のため講座参加者を定員である25名に絞り、外部講師に卒業生を呼んでの実施を計画している。		受講生25名を対象に学校開放講座を5回実施することができた。高等部生徒のクイズや、中高生徒及び外部講師との交流がとても好評で、来年度も同様に実施していきたい。
			地 支	「地域支援だより」やWebページを通して、聴覚障害理解のための情報や、その時の状況に応じて必要な情報をわかりやすく伝えていく。	A	—		「地域支援だより」を6回発行した。通級や教育相談の利用者、関係機関に配布し、webページにも掲載した。webページでの「聴覚障害Q&A」では、過去の記事を見直し更新を行った。		児童生徒や保護者などに知ってほしい情報を選択し載せていく。写真やイラストを活用し、読みやすくなるよう工夫を続ける。
			進 路	実施予定の進路行事について案内やHPで発信するとともに、実施後にはHP、掲示板、キャリア教育だよりなどで活動の様子を伝える。	—	—		のべ18名から講演会等の進路行事への申し込みがあった。総数は少ないが、これまで高等部だけだった参加希望者が幼稚部や中学部へと広がって、関心の高まりが確認できた。		HPやキャリア教育だより、校内の掲示板での情報発信を継続するとともに、保護者の興味・関心事に合った講演会等を企画する。
			2 保護者、地域、関係機関との共通理解が深まり、有効な支援が行われていますか。	②「個別の教育支援計画」について、保護者の80%以上から満足を得ている。		幼稚部主事	保護者との個別面談や保護者会の時間を十分に確保して保護者のニーズや要望を把握する。保護者と共通理解を図りながら支援を行っていく。	A	A	A
幼	保護者面談や送迎等の時間を活用して、幼児の課題等について保護者とよく話し合い、共通理解を図る。関係機関とも連携して方法を探る。	—				A		保護者面談や送迎等の時間を活用して、支援の目標や手立て、幼児の様子について保護者に伝えた。幼児の課題等について関係機関のSTや発達支援事業所等と連携を図りながら支援を行った。		保護者会や保護者面談等で、引き続き幼児の支援目標や手立て、幼児の様子について丁寧に伝えていく。また、必要に応じて外部機関と共通理解を図りながら支援していく。
小	保護者会や個別面談では、保護者のニーズを把握し、指導や支援のねらいや手立てについて共通理解を図る。学部全体で情報を共有し、支援する。関係機関とも連携する。	—				A		保護者会では具体的な活動の様子に触れながら、指導のねらい等を伝えた。個別面談では学校での様子を丁寧に伝えると共に保護者の思いに沿って共通理解を図った。面談での内容等を学部で共有したり、STやSCなどの関係機関との連携につなげた。		保護者会や個別面談では、引き続き学校での児童の様子を丁寧に伝えると共に、保護者の思いに沿ってニーズを把握する。必要に応じて、関係機関と連携しながら支援する。
中	保護者会や個別面談の時間を活用して、保護者のニーズや要望を把握するとともに指導・支援のねらいや手立て、生徒の成長の様子などを伝える。また関係機関とも連携して支援に当たる。	—				B		保護者会では、学部としての方針や取組のねらいを伝えるとともに生徒の活躍を共有した。個別面談では、支援のねらいや手立て、生徒の成長の様子などを伝えた。また、必要に応じてアドバイザーや寄宿舎とも連携して支援に当たった。		保護者会や個別面談では、引き続き学部の方針や生徒の様子を丁寧に伝えるとともに、必要に応じて外部機関などとも連携を図りながら支援していく。
高	本人保護者の願いや昨年度支援内容の振り返り等を基に高等部全体で卒業後を視野に入れて支援計画を策定する。個別面談で本人保護者と共通理解を図り、学部全体で支援する。	—				A		昨年度の引継ぎ内容を基に保護者や本人と確認しながら計画を策定した。目標の達成度や支援内容について、学期はじめ等に学部全体で共通理解を図りながら取り組んだ。		教育支援計画の達成状況や支援内容について部会等で振り返りを行い、必要に応じて外部機関とも共通理解を図りながら進めていく。
③学校間や地域住民との計画的な交流や居住地校交流等を実施し、交流の意義や活動内容について理解している保護者や教員が80%以上である。			小学部主事	幼児児童生徒にとって効果的な交流になるように、相手校や地域住民と交流の仕方を検討しながら進めていく。また、そのねらいや成果などを保護者に発信していく。また、寄宿舎における地域との交流は地域清掃などを行い、寄宿舎生が地域の一員であると自覚できるような活動をしていく。	A	A	A	学校間交流では、手話であいさつを交わしたり、自分の聞こえについて伝えたりするなど、児童生徒が主体的に交流しようとする姿が見られた。居住地校交流では、児童生徒の実態に応じたねらいを設定し、相手校と連携して進めることができた。	外部との交流や聞こえる人の中に入っていく経験を積むことは大切である。	これまで同様に学校間交流、居住地校交流を進めると共に、オンラインによる交流や、高等部、寄宿舎による地域との交流を計画的に進めていく。
			幼	ろっくひよこプリスクールとの直接交流の機会を設けていくようにする。幼児が大きな集団の中で同年齢の幼児と関わりが持てるように相手園と連絡を取り合い進めていく。	—	A		直接交流の機会が昨年度より増やすことができた。自然な関わりの中で、大きな集団を経験することができた。同年齢の幼児たちと実態に応じて関わるることができた。	近隣の園との交流は有意義で、さらに回数が増えるとうい。	今後も幼児にとって意義深い交流になるように、回数や内容等について、相手園と連絡を取り合い実施できるようにしていく。
			小	城南小学校との訪問交流や交流マラソン、居住地校交流では、お互いがより良い学びの機会となるよう、交流先と連携して実施する。	—	A		交流マラソンでは、児童が手話であいさつをするなど、お互いを理解しようとする様子がみられた。居住地校交流では、児童の実態に応じた目標に向けて連携して進めることができた。		当初の計画にはなかったが、高学年児童が川崎市立聾学校とオンラインによる交流を行った。次年度は、これまでの交流に加え、計画的に実施したい。
			中	学校間交流は3年ぶりに前橋一中との交流を再開するとともに、長野聾学校との0n-lineも継続して行う。また、居住地校交流では保護者や生徒の希望を聞き取りながら相手校と密に連絡を取って進める。	—	B		学校間交流では、前橋一中との交流を再開するとともに、長野ろう学校との0n-line交流も継続して行い、学年によっては県立盲学校との交流も行った。また、居住地校交流では、生徒の実態に応じたねらいを設定して、相手校と綿密な計画を練って進めることができた。		当初の計画にはなかったが、1年生の生徒が県立盲学校の1年生との交流を行った。さまざまな学校間交流を通して生徒も主体的に取り組む様子が見られた。次年度は、これらの交流活動を年度初めの計画に盛り込み、計画的に実施したい。
			高	大学生とのピアエデュケーションや勢多農林高等学校との交流では、卒業後の健聴者との生活も視野に入れて活動内容を計画する。	—	A		学校間交流では、相手校の企画だけでなく、手話クイズや自分の聞こえについて説明するなど生徒主体の活動も取り入れ、卒業後の健聴者との生活につながるようにした。		学校間交流だけでなく販売会等を実施し、地域の方とも交流できるようにする。
			舎	地域清掃の他、避難訓練実施の際に近隣へお知らせのポスティングを行う。寄宿舎生が地域の一員であると自覚できるような活動を実施する。	—	A		計画に沿って地域清掃等を実施した。直接の交流は少なかったが、地域への貢献という意識を持ち、自分もその一員であると自覚を促すことができた。		外出の機会が増え、地域と関わる機会が増えた。行事に限らず、寄宿舎生が地域の一員であると自覚できるような活動していく。

羅 針 盤		方 策	点検・評価	到達度	達成状況の分析	学校関係者評価	次年度の課題			
評価対象	評価項目							具体的数値項目	担当	自己評価
Ⅱ 地域の特別支援教育に関するセンタースタッフ的な役割を果たしていますか。	3 障害のある幼児児童生徒等の教育について、助言援助に努めていますか。	④地域の幼児児童生徒等に対する相談に適切に対応し、本人や保護者、在籍校の関係者等の80%以上から満足を得ている。	地域支援部	地域の幼児児童生徒とその保護者、在籍する園、学校、関係機関からの相談に応じる。幼児児童生徒の実態や環境に合わせ、適切な対応ができるよう支援内容、支援方法について検討を重ねる。	A	—	A	特別支援教育コーディネーター、専門アドバイザー、通級指導教室・教育相談担当、高校通級担当で情報交換を行った。これにより、それぞれのケースに合わせた支援を考慮することができた。必要に応じて複数対応することできめ細かな支援をすることができた。	人工内耳手術後の乳幼児や幼・保・こども園の利用開始時に医療機関職員とサポート訪問を行い有効な情報交換ができた。部内での情報共有を徹底することで、全員で同じ方向から支援することができた。	幼児児童生徒の実態や環境を把握するとともに、特別支援教育コーディネーター、専門アドバイザー、通級指導教室・教育相談担当・高校通級担当が連携しよりよい支援ができるようにする。
		⑤小・中学校等の依頼に応じて、在籍する児童生徒に関する理解を深めるためのサポートをすることで、本人や保護者、在籍校の関係者等の80%以上から満足を得ている。	地域支援部	園や学校への訪問を行い、サポートや情報交換、職員研修、難聴理解授業を実施する。合理的配慮について地域での取り組み例を紹介するなど、更に理解が広がるようにする。	A	—	A	小中学校・高等学校等サポート事業で59件の訪問相談を行った（1月まで）。個々の聴力や特徴も踏まえて聴覚障害についての説明を行った。また、配慮、学習内容もそれぞれに合わせて具体的に提案することで、在籍校での理解を広げることや支援につなげることができた。	難聴理解授業では児童の学習環境をよりよくするために必要な配慮について本人と一緒に考え授業を組み立てた。在籍校の担任とも打合せを重ね、本人にとって自信につながる授業になった。在籍校の職員研修を本人に合わせた内容にすることで、先生方に身近に感じてもらうことができた。その結果学校全体で支援するという意識をもってもらうことができた。専門アドバイザーの訪問をきっかけに学校での対応に変化が見られ子どもたちが安心して学校生活がおくれるようになった。	合理的配慮への理解が広がったり難聴学級が増えたりし、在籍校で必要な配慮が受けられるケースが増えてきた。しかし、配慮内容や難聴学級の在り方については学校によって差がある。各学校の実態を尊重しながら、適切な配慮等を伝えられるようにする。
	4 保護者、地域、関係機関との共通理解を深めるため、連携強化と啓発に努めていますか。	⑥医療機関をはじめ、各種関係機関へ年間10回以上訪問し、聴覚障害支援センターの周知と連携強化を図る。	地域支援部	状況に応じて、医療機関、関係機関への訪問やメール、オンラインでの情報交換を行う。聞こえや補聴器のトラブル、保護者への対応等について、共通理解を図りながら支援する。それぞれの領域で、校内や地域の幼児児童生徒一人一人に合った支援が継続できるよう連携していく。	A	—	A	研修会等で難聴学級担任や地域の通級指導教室担当と情報交換できる場を設定した。それぞれの立場でできることを相談したり聾学校の特別支援教育コーディネーターや専門アドバイザーの活用を促したりすることができた。県内の医療機関と連携し情報共有することで、実態に合わせた保護者支援をすることができた。	地域支援だよりやオーディオロジーニュースを作成し、聞こえや補聴器の管理について周知することができた。関係機関と連携することで違ったアプローチで子どもを見ることができるようになった。保護者への対応も丁寧に行うことで、安心して学校生活が送れるようになった。	県外の医療機関や群特研難聴・言語部会に所属していない学校との連携・訪問の方法について検討が必要である。
Ⅲ 幼児児童生徒一人一人の実態に応じた適切な指導をしていますか。	5 個に応じたきめ細かな指導を行っていますか。	⑦「個別の指導計画」にもとづいた指導の結果について、保護者の80%以上から満足を得ている。	中学部主事	幼児児童生徒一人一人の成長の様子や学習状況について学部内で情報交換し、丁寧な実態把握をして指導計画を作成する。ねらいや具体的な手立てについて保護者と話し合う時間を十分に確保し共通理解を図り個に応じた指導ができるようにする。	A	A	A	保護者面談では、個別の指導計画の内容や手立て、達成度について伝え、今日理解につなげた。また、学部職員はもちろんのこと、必要に応じて寄宿舍とも共有して指導に当たった。		幼児児童生徒一人一人の状況を学部内で共有し、難しいケースについては学部全体で指導、支援が行えるようにする。また、計画と実態の差が生じた場合には、指導の方向性について本人・保護者・寄宿舍・学部全職員で共通理解を図るようにする。
		幼 個別の指導計画のねらいや具体的な手立てや成果と課題について職員間で情報交換を行っていく。また、保護者と共通理解し、家庭と連携して進められるようにする。	—	A		個別の指導計画のねらいや具体的な手立てや評価について職員間で時間を設けて情報交換を行った。そこから見えてきた課題について保護者と共通理解を図りながら、家庭と連携して進めることができた。		幼児一人一人の実態把握を丁寧に行い、学部全体で情報を共有して指導支援を行っていく。また、保護者に対しても共通理解を図りながら進めていけるようにする。		
		小 個別の指導計画のねらいや手立て、成果や課題について、保護者にわかりやすく伝え、共通理解を図る。学部内で情報を共有し、指導に生かせるようにする。	—	A		保護者面談では、個別の指導計画のねらいや手立て、成果や課題について丁寧に伝え、共通理解につなげた。学部の情報交換会で各児童の課題を共有した。		児童一人一人の様子や学習状況について、学部内で情報を共有し、難しいケースについて学部全体で指導、支援を行えるようにする。		
		中 個別の指導計画のねらいや具体的な手立てや成果と課題について職員間で情報交換を行っていく。また、評価の書き方も保護者に分かりやすいように具体的に記述して、保護者と共通理解を図る。	—	B		保護者面談では個別の指導計画のねらいや具体的な手立て、成果や課題について丁寧に伝え、共通理解につなげた。学部の情報交換会で各生徒の課題も共有し、指導に活かした。		保護者面談を実施する前に生徒と担任との面談を実施して、生徒の思いを理解した上で保護者面談を行い、指導の方向性を確認していく。		
		高 個別の指導計画の指導内容や達成度について、本人・保護者と共通理解を図り指導にあたる。学部内で振り返りをし、個に応じた適切な指導ができるようにする。	—	A		個別の指導計画の内容や達成度等について、本人・保護者・寄宿舍・学部全職員で共通理解を図りながら取り組んだ。個別に課題が生じたり目標を達成できたりした場合は計画を見直し、きめ細やかに指導した。		計画と実態の差が生じた場合には、指導の方向性について本人・保護者・寄宿舍・学部全職員で共通理解を図るようにする。		
		⑧一人一人の状態や発達段階等に応じたコミュニケーション手段を活用していることと教職員の80%以上が判断している。	教頭	児童生徒・保護者・職員を対象に実施した「群馬県特別支援学校手話（言語条例）普及啓発事業」での内容をふまえ、よりわかりやすく手話を含めた伝達手段を活用してコミュニケーションを図る。毎月の職員会議で幼児児童生徒と伝え合うためのワンポイントを確認する。	A	A	A	「群馬県特別支援学校手話（言語条例）普及啓発事業」での内容をふまえ、乳幼児教育相談において、手話を用いた親子の豊かなコミュニケーション及びことばの発達に関する支援や、手話に関する相談及び情報提供を行うとともに、幼児児童生徒一人一人の障害の状態や発達段階等を踏まえ、手話を含む多様なコミュニケーション手段を用いて各教科等を学んだり、自立活動において手話を学んだりする指導の充実に努めた。また、PTAと協力し、日常的に円滑なコミュニケーションをとることができるよう、手話について学んだり、相談したりできる機会の設定した。さらに、手話に関する技術の向上などの様々な教育課題に対応できる教員としての専門性を高めるための職員会議での研修などを実施した。	子供たちの思いを受け止め、生きる力を育てるためには、先生方の手話スキルも必要となってくる。予算面で全体手話研修の回数に限られているため、毎月の職員会議でワンポイント手話を取り入れているが、5～10分程度なので時間的には不十分である。各部署でも手話研修を実施できるようお願いをして各部署に委ねている状態だが、業務の忙しさでなかなか各部署で手話研修が進められていく、教員の手話技術の向上が難しいと思われる。1つの案として、通常部会で月1回10分程度手話研修を行うと決めて行う方法もある。毎回内容を考えるのが大変なので、手話検定、手話奉仕員養成講座、書籍、動画の手話読み取り、タブレットを活用してやるとすれば、先生方の負担も減るかと思われる。研修部や各部署で検討してもらえると嬉しい。	群馬県特別支援学校手話（言語条例）普及啓発事業に即して、幼児児童生徒の特性に応じて視覚教材などのコミュニケーションツールを積極的に利用していくとともに、幼児児童生徒が手話を獲得し、手話で各教科・領域を学び、かつ、手話を学ぶことができるように教育環境をより一層整備していく。幼児児童生徒が手話を獲得し、手話で各教科・領域を学び、かつ、手話を学ぶことができるように乳幼児期からの手話の教育環境を整備し、教職員の手話に関する技術を向上させ、幼児児童生徒及びその保護者に対する手話に関する学習の機会を提供し、教育に関する相談及び支援に努める。引き続き、教員の専門性の向上に関する研修を職員会議や各学部署で実施するとともに、手話検定等の活用も検討する。
⑨各学部署と寄宿舍との連携を図るため、情報交換の機会を年間2回以上設けている。	寄宿舍	定例の連絡会議の他、日常の観察から変化を見逃さずに各学部署、担任と情報を交換するよう意識していく。情報交換を通じて、生徒児童のより正確な実態把握と適切な指導を図る。	A	A	A	学舎連絡会議の他、日頃から連絡を意識して行った。各学部署のonenoteを利用し、連絡が各学部署で共有しやすいうにした。各学部署の方針を意識し、素早い対応と連絡のうえで生活上や学習上の問題解決が行われている。		正確な記録と誤解のない伝達を意識し、連絡時には情報の共有しやすさも考え、正確に実態把握できるようにする。		
6 指導内容の確実な定着を図る授業が行われていますか。	10 学力の向上・定着のために、わかる授業の工夫や課題、補習を行い保護者から80%以上の満足を得ている。	幼 幼児の実態把握を行い、部内研修等で課題を共通理解する。その上で環境設定や教師の支援をしていく。また、授業ではICTなどの視覚教材等も活用していく。	高等部主事	幼児児童生徒の実態や学習状況の把握を行い、部内で共通理解し指導にあたる。教科別会議などで学部署間で情報交換をしながら系統的な指導に取り組む。視覚教材やICT等を活用し、わかる授業の工夫に努める。	A	A	A	学習状況について、部内研修や外部模試等で客観的に把握した。授業では、ねらいや計画の明確化やふり返りの実施により、見通しを持って学習できるようにした。発達段階に応じてICT等を活用したわかる授業の工夫を行った。	・教材研究にかける時間の確保が課題である。	教科別研修を活用し、学部署間の系統やICT等を活用した授業の工夫等について共通理解を図りながら指導にあたる。
		小 児童の実態を把握し、課題を明確にする。職員間で共通理解を図り、学部全体で指導できるようにする。ICTの効果的な活用や、児童にわかりやすい手話表現について部内研修等で取り組めるようにする。	—	A		幼児の実態把握を行い、部内で課題等を共通理解しながら支援を行った。環境設定や教師の支援を研修し、幼児の思いを受け止め、分かる授業を進められるようにした。また、ICTなどの視覚教材も授業の振り返りなどで活用した。		今後も幼児の実態を把握し、幼児の思いの受け止め、分かる授業を進められるように環境設定や教師の支援について考えていく。また、ICTの有効な活用についても取り組めるようにする。		
		中 わかる授業にするためのICTの活用など教材の工夫をしていくと共に学習習慣の定着が図れるよう家庭や倉と情報交換を積極的に行い、共通理解のもと指導していく。また、各種の検定試験や模擬試験にも挑戦するようにし学習意欲を高める。	—	B		児童の発達段階に応じて、ICT機器の活用や視覚教材を工夫しながら基礎基本に力を入れ、学力向上、定着を目指した指導を行った。部内研修では、児童が互いに伝え合い、自分の考えを深めるための指導のあり方について取り組み、コミュニケーション能力を高める指導に努めている。		次年度も児童が自分の思いや考えをきちんと相手に伝えることのできる力を伸ばせるよう学部署全体で取り組むICTの効果的な活用や、児童にわかりやすい手話表現について部内研修等で取り組めるようにする。		
		高 わかる授業にするためのICTの活用など教材の工夫をしていくと共に学習習慣の定着が図れるよう家庭や倉と情報交換を積極的に行い、共通理解のもと指導していく。また、各種の検定試験や模擬試験にも挑戦するようにし学習意欲を高める。	—	B		ICTを効果的に活用するとともに、ねらいや計画を明確にすることでわかる授業の工夫を行った。学力の向上や定着のために、家庭学習の仕方について学部署全体で確認するとともに、家庭や寄宿舍と共有した。また、全国学力検査や外部模試の結果を学部署全体で共有して指導に活かした。		単元ごとのねらいを明確にして、生徒の学習状況を把握し評価するとともに、指導にも活かしていく。また、部内研修や教科別研修などの機会を活用して情報交換をしながら、分かる授業の工夫に努める。		

羅 針 盤		方 策	点検・評価		到達度	達成状況の分析	学校関係者評価	次年度の課題			
評価対象	評価項目		具体的数値項目	担当					自己評価	外部アンケート	総合
				高	ICT等の活用や教材の工夫をし、わかる授業の工夫をする。生徒と授業の振り返りをする事で、生徒自身が何ができるようになったか実感できるようにする。各種の検定試験や模擬試験にも挑戦するように学習意欲を高める。	—	A	ICTを効果的に活用しわかる授業の工夫を行った。学力の向上や定着のために予習復習発展課題や個に応じた補習を行った。各種検定にも挑戦・合格し、目標に向けて計画的に学習した。定期テストや外部模試のふり返りを行い、自分の強みや弱点を意識して学習計画を立てられるようにした。		学習目標を明確にし、生徒が自分で何ができるようになったか把握できるようにする。	
		①すべての教職員が、学校・学部等で行う研修会や授業研究会に年間3回以上参加し、授業の改善が図られている。	研修推進部		手話研修、実践検討会、講師招聘研修などの校内研修に必要に応じてオンデマンドも活用しながら取り組み、全職員が学び、全職員に還元できる研修を進め、授業力の改善と向上を目指していく。研修内容の精選と優先順位を考えながら研修を進めていく。	A	—	A	優先順位や内容を検討し、内容を絞って研修を進めた。また、職員のニーズに合った内容を扱えるように、実践の中での課題について事前に校内で確認することで、授業改善や指導力の向上につながる講演会を実施することができた。講演会等の研修にオンラインを活用することで、扱える内容も広げることができた。	多種類の研修があり、時間的に参加することが難しい。	実施した校内研修に関して、改善点等を確認し、回数や内容の精選を行ってきたが、1年間を通して様々な分野の研修を行っている。今年度実施した校内研修に関しても反省点等を確認し、限られた時間の中で、効率的に必要な内容を研修していけるように検討を行い、来年度の計画を作成する。
		②ICT等を効果的に活用し、授業力が向上したと考えている教職員が80%以上いる。	図書情報部		ICT研修を継続して行い、知識を深めるとともに、ICT活用に関するマニュアル等を作成し、タブレット端末等のICTを効果的に活用した授業の取り組みを推進する。	A	—	A	タブレット端末を使用できる環境が整ったため、授業でのICT活用がさらに増えた。また、職員対象に学習支援アプリ(ロイロノート・スクール)の操作方法等タブレットに関する研修や、Googleクラスルームに関する研修を行った。		ICT研修を継続して行い、知識を深めるとともに、授業での系統的なICT活用を計画・推進する。
		③本好き、読書好きな幼児児童生徒を育てるために、学部や発達段階に応じた読書指導に月3回以上取り組んでいる。	図書情報部		学習支援図書セットを借りたり、図書だよりやポスターにて各部の読書活動やお薦めの本を紹介したりする等、本にふれる機会を作り、読書活動を促していく。	A	B	A	幼稚部小学部は定期的に本の読み聞かせを行った。中学部は毎朝、朝読書の時間を設定した。高等部は週に1回読書の時間を設定した。発達段階に応じて、本にふれる機会を作ることができた。	学部で朝読書に取り組んだ。	継続して県立図書館の学習支援図書セット、こども図書館の学習支援セットの貸し出しの申請を新年度に行い、幼児児童生徒の実態に見合った本を選んで貸し出しが出来るように、準備を行う。各部で本への興味関心が高まるような本の紹介や掲示を工夫していく。幼児児童生徒が主体的に読書を進められるように支援していく。
	7 専門性の維持向上が図られていますか。	④研修内容を生かし、自分の指導力が向上したと考えている教職員が80%以上いる。	研修推進部		講演会や様々なオンライン研修に参加を促すなど研修の機会を作り、専門性や指導力の向上につなげる。	B	—	B	関連研の様々な研究会の案内や、県内で実施される各発達段階、各教科に関する研修会に関して、学校全体に実施される研修の内容を案内し、参加を促したことで、興味を持った内容の研修への参加を促し、そこで得られた情報について関係する学部や教科の担当者で共有することができた。	手話の技術のある教諭には、長くいてほしい。	専門性や指導力の向上を図るために、関連研の初転任者研修や全日研などに多くの職員が参加できるように働きかけを行うと共に、これらの研修会の際には、研修参加者がいる場合の校内の体制の組み方などについて、希望者が参加しやすいように各学部にも協力をお願いするようにする。
IV 健康や安全の確保に努めていますか。	8 健康に関する配慮や対応を適切に行っていますか。	⑤幼児児童生徒一人一人の健康上の配慮や対応について、家庭と学校が連携して取り組み、80%以上の保護者から理解を得ている。	保健部		毎朝家庭での検温を促し、ホームルームや朝の会で幼児児童生徒の健康観察を行う。歯と口の健康づくりについて、地域等の専門家の指導に加え、養護教諭による個別歯みがき指導を継続する。個別歯磨き指導の結果を家庭と共有したり、長期休業中には歯磨きカレンダーに家庭での歯磨きの様子を記録したりし、家庭とも連携して取り組むことで幼児児童生徒が習慣化できるようにする。	A	A	A	・各学部、HRや朝の会で健康観察を行い、幼児児童生徒の健康状態を確認することができた。 ・前橋市歯科衛生士による歯みがき指導を実施した。6月には幼稚部保護者、小(低学年)～高等部まで講話を中心とした指導を受けた。11月には小学部(高学年)が講話、幼稚部幼児は視覚的の手掛かりを用いての分かりやすい指導を受けた。歯みがきカレンダーや歯みがき指導では実施後、保護者からコメントをもらうなど、保護者と連携を取りながら取り組んでいる。		・歯みがきカレンダーの実施などは年齢や発達に応じながら、必要に応じて内容を精選して取り組んでいく。
		⑥一人一人の発達段階に応じた生活指導(いじめ防止等)や教育相談、情報共有が適切に行われていると考えている保護者が80%以上いる。	生徒指導部		いじめ防止に関しては、いじめの定義、いじめに対する措置について、教職員への周知を図る。幼児児童生徒への挨拶、言葉掛け、励まし、賞賛等による働きかけを日常的に行い、全ての幼児児童生徒の発達を支える「発達支持的生徒指導」を推進する。教育相談は、SCとSWの両方のカウンセリングが継続できるようにする。	A	A	A	いじめ防止対策推進法や聾学校いじめ対策基本方針は、職員会議への周知を行い、短時間いじめの定義などの研修を実施した。発達支持的生徒指導については、教職員への周知を行い、推進されつつある段階である。SCは年11回、SWは年8回実施できた。また次年度SW担当者が交代となるが、半年以上の期間をかけて丁寧に引き継ぎが行われた。		法に基づく対応、組織的対応については、次年度も継続して周知を図る必要がある。発達支持的生徒指導もさらに推進されるような方策を図る必要がある。またSC、SWの相談件数が減少しているが、未然防止等にも役立てるようにする。
	9 危機管理体制が確立され、緊急時への備えができていますか。	⑦緊急時対応訓練の実施と保護者との緊急時連絡体制を確保する。(訓練年3回以上)	安全管理部		発達段階にあわせて、各で幼児児童生徒に必要な避難訓練の内容(火災・地震・水難・不審者等)を企画実施する。保護者との連携方法を各で確認する。	A	A	A	第1回(5月)で火災訓練、第2回(10月)で地震・水難の訓練を実施した。また、不審者訓練を7月(職員)と9月(小中高)と11月(幼)に分けて実施した。昨年度までの反省を踏まえて手直しした要項に従って、各部が連携し、大きな問題はなく実施することができた。事後、反省・改善事項等もしっかりとピックアップできた。	避難訓練の内容を見直し、防火クイズや動画視聴など、子どもにとって身近に感じられる実践的な活動を取り入れるようになってきた。不審者避難訓練はワンパターンになりがちなので、様々な場面を想定して訓練をしたり、ミニ講話(ニュースを取り上げて事件の怖さを知る)を聞いたりとする機会もあると良い。	避難訓練について、今年度点検を済ませたインジケータ(非常用ランプ)を使用し、視覚的な注意がより喚起されるようなものとする。不審者対策について、刺股や竹の棒などの整備を事前に行うことを行う。また、小・中・高の生徒を同時帯に指導することになるが、発達段階ごと、自動・生徒全員それぞれに得る知識や経験があるように計画を練る必要がある。
		⑧学校で救急法講習会を実施し、80%以上の教職員が講習会修了者となっている。	保健部		感染症の状況に応じて実技研修やWeb講習会の講座を準備する。嘔吐や失禁などの対応方法について研修を計画する。	A	—	A	・今年度はほぼ全職員対象に消防署による救急救命講習を実施することができた。心肺蘇生やAEDの使い方を学んだ。乳幼児に対する救命方法も学ぶことができた。 ・全学部、寄宿舎で実態に応じた嘔吐物処理研修・救急搬送訓練を実施することができた。		・来年度も同様に行っていく。
	10 幼児児童生徒、教職員、及び保護者全員の参加で、安全な学校環境の維持に努めていますか。	⑨教職員による安全点検(校内および校外)を月に1回実施するとともに、すべての関係者がそれぞれ年間2回以上環境整備事業を行う。	安全管理部		各部の職員が、担当する幼児児童生徒の活動に関係する視点で安全点検を実施していく。施設の老朽化への対応や清掃用具の整備等についても、事務や公仕と連携して速やかに対応する。幼児児童生徒が活動する場所の除草作業、落ち葉清掃等を実施する。	A	A	A	校内・校外の場所別安全点検を月に1回実施し、危険箇所の確認を行っている。危険箇所を発見した場合は、事務部、公仕、管理職等に相談しつつできる限り早期に改善を図った。除草作業については、全体を公仕、時に各所を各部職員、また夏季にはPTAや同窓会にもご協力いただいていた。生徒は落ち葉清掃を主に行った。6,9,10月に寄宿舎、また11月に各部ごと、12月に全体で実施した。なお、落ち葉が多い時期は、高等部生が放課後に特別清掃を行った。環境保健委員を中心に、生徒たちは自主的に清掃に取り組むことができていた。	校舎の老朽化も進み、校内では対応が難しい修繕箇所も出てきている。優先順位を付けながら修繕希望を出し、早期に改善してもらえるよう協議していきたい。落ち葉清掃について、実施の流れや雨天時の対応について、各部ごとに整理して効率的に行いたい。年度はじめに清掃に関わる道具の確認や整理を行う。予算も限られるため、大切に長く使えるように配慮しつつ使いたい。	
V 将来の生き方に結びつく進路指導を行っていますか。	11 キャリア教育の視点から、指導内容を整理して系統的な指導を行っていますか。	⑩学級活動(ホームルーム活動)をはじめ学校教育全体で自分や将来を考える活動が、主体的な進路選択に役立っていると感じる保護者が80%以上である。	進路指導部		保護者会等で日々の授業と将来へのつながりについて具体的に説明するとともに、担任が幼児児童生徒の発達段階に応じた指導ができるように情報発信を行う。また、「キャリアパスポート」を継続して利用・活用するための検討を行う。	A	A	A	担任を中心にキャリアパスポートの利用やキャリア教育だよりを通じて進路に関わる情報や他学部の活動について発信することで、児童生徒が将来を考える機会を定期的に設けた。また、面談や保護者会などの機会を利用して、日々の学習について説明をしたり、進路先についての具体的な事例を直接伝えたりするようにした。児童生徒と保護者それぞれに対して年間1～2回の進路希望調査を実施し、将来への考えや進路に関する悩みを把握するようにした。	検定の実施などを継続し、校内だけではなく世間にも通じる力を身につけてほしい。	小学部の児童だけでなく、中学部・高等部の中にも自分自身の特性と将来の希望がかけ離れている生徒がいる。進路について自ら調べる活動を増やしたり、進路指導部として必要な情報を提供したりすることについて検討し、系統的な指導ができるようにしたい。保護者に対しては、教務部等と連携しながら教育課程についての情報提供をして、具体的、現実的な進路選択につながるようにする。
	12 保護	⑪他機関と連携等し、進路(含むキャリア教育)関係の行事を年間3回以上実施している。	進路指導部		進路に関する行事について、各学部や寄宿舎の掲示板を利用して幼児児童生徒、教員が他学部の情報にもアクセスできるようにする。保護者が関係者と直接話をする機会を設定したり、来校が難しい保護者に対してはオンラインなどで参加できるような手段を工夫したりする。	A	A	A	企業の採用担当者との懇談会、事業所の支援員による講演会やハローワークの出前授業、特例子会社や福祉サービス事業所の見学会を実施し、働くために必要な力や心構えなどについて生徒が考える機会を設定した。地域の学校に通っている子どもの保護者と本校の在籍幼児児童の保護者との情報交換会を実施し、保護者の悩みや不安を解消できるようにした。講演会の案内をHP上に掲載することとともに、保護者の参加申し込みをGoogle Formsで実施した。	さまざまな業種の事業所を見学したり、卒業生から直接話を聞く機会を継続することで、進路についての漠然としたイメージを児童生徒が具体化したり、進路決定の参考とできるようにする。また、企業の採用担当者を対象に聴覚障害についての理解を深めてもらえるような働きかけをすることで、新たな就業体験先や就労先を開拓する。全学部の幼児児童生徒と保護者、福祉サービス事業者や市町村の福祉課と学校が情報交換する機会を設定する。	